

法華經（藍紙本） 京都・千手寺蔵

紙本墨書

平安時代後期

（図版3 4 32～35）

千手寺蔵『法華經』七卷（以下、千手寺本と略称）は、料紙に藍紙を用い、界線は銀界で界高一・九・五cm、界巾一・八cm、一紙の行数は二十八行、経文は和様の端正な文字で書写された平安時代後期の優品である。巻第四の一卷を欠き、巻第一の巻首と巻第二・第六の巻末を欠失しているが、本文中に白点・朱点・墨書、紙背にも処々に朱書や墨書で注記が加えられている。書写・移点者については奥書より保安二年（一一二二）、覚澄・秀覚^①らによって移点されたことが知られ、本奥書からこの千手寺本は同じく藍紙を料紙とした立本寺蔵『法華經』七卷（『観普賢經』を含む。以下、立本寺本と略称）よりの書写・移点本であることが確認できる。重要文化財に指定されている立本寺本は、寛治元年（一〇八七）より承徳三年（一一〇九九）にわたって興福寺僧経朝が加点し、白点は赤穂珣照聖人本、朱点は元興寺明詮僧都本、墨点は興福寺寿慶聖人本によったもので、『法華經』の古訓点資料としても夙に有名な作品である。^②この立本寺本は、本来、法華經開結共十巻を書写したものと推察されるが、今は開経の『無量義經』と巻第二・第六の三巻を欠き、更に巻第四・第七には若干の欠出、巻第八は「勸発品」のみを残している。立本寺本の書写年代は書風や加点時期より、十一世紀中～後期と見られるが、

今の千手寺本の書写年代は立本寺本より遅れること約五十年、十二世紀初期と見られる。今、千手寺本の法量と奥書^③を示せば次のようである。

〔奥書〕

〈巻第一〉

〔白書〕「保安二年九月廿一日於宿院雙巖房移点

畢、本經以赤穂珣照君点本、修学

房移点本而已。釈覚澄之本」

〔朱書〕「本經云、以朱処々所移点者是明詮僧都道本也^{云々}。

移点僧秀覚

〔白書〕

「覚澄之本」

〈巻第三〉

〔白書〕「点本經云、寛治元年^{歲次丁卯}五月十四日以赤穂珣照聖人

訓点經移点了 末学沙門経朝」

〔白書〕「保安二年^{歲次辛丑}十月二日以件経移点了、沙門願澄」

〔朱書〕「以元興寺明詮僧都自筆点遵本為其本、大都移点了 経朝」

〔朱書〕「以件経同四日移点了 沙門願澄」

〔墨書〕「墨点者以興福寺寿慶聖人点為其本耳」（図版32）

〈巻第五〉

〔白書〕「点本經云寛治元年五月十九日以赤穂珣照聖人点為其本

移点了、処々少付定慶聖音誦了、沙門経朝」

〔朱書〕「同二年正月之比、以元興寺明詮僧都点遵本為其本、大都

移点了、

若与赤穂同処不別点之、得其意可読之、僧経朝点了」

〔墨書〕「墨之訓并声、興福寺寿慶聖人之本了」

第8卷	第7卷	第6卷	第5卷	第3卷	第2卷	第1卷	紙 繼
47.3cm	48.0cm	47.9cm	47.7cm	50.0cm	49.5cm	50.3cm	①
49.5	50.4	49.8	50.3	50.0	50.0	50.0	②
50.1	50.6	49.9	50.4	50.0	49.9	49.9	③
49.8	50.3	50.1	50.2	50.2	50.0	50.0	④
49.9	50.3	50.2	50.2	50.2	50.0	50.2	⑤
50.0	50.3	50.2	50.3	50.2	50.0	50.3	⑥
50.0	50.4	50.0	50.2	50.2	50.0	50.2	⑦
49.8	50.3	50.2	50.1	50.3	49.8	50.2	⑧
50.4	50.4	50.3	50.1	50.3	49.8	50.2	⑨
50.3	50.4	50.3	50.3	50.2	49.9	50.2	⑩
50.3	50.2	50.3	50.3	50.2	49.9	50.3	⑪
50.4	50.5	50.3	50.3	50.1	50.0	50.3	⑫
50.2	50.2	50.1	50.1	50.2	49.7	50.0	⑬
50.2	50.4	50.1	50.4	50.2	49.4	50.2	⑭
50.0	50.1	49.7	50.2	50.2	49.9	50.0	⑮
22.8	50.1	50.2	50.1	50.1	50.0	50.1	⑯
	50.0	50.3	50.2	50.2	50.1	35.3	⑰
	24.7	49.9	50.4	50.0	50.0		⑱
			48.3	50.1	50.2		⑲
			18.7	49.7	50.2		⑳
				17.6			㉑
771.0	877.6	899.8	968.8	1,020.2	998.3	837.7	計
25.9	25.9	25.9	26.0	25.9	25.7	25.7	縦法量
		卷末一紙分欠			卷末二紙分欠	卷首二紙分欠	備考

〔卷第七〕

〔白書〕寛治元年五月廿二日以赤穂珣照聖人

点為其本、移点了、処々以朱付定慶

聖音讀之、末学沙門経朝

〔朱書〕同二年正月之比、以元興寺明詮僧都点善本為其本、以朱

大都移点了、若与赤穂同処者不別点之、朱甬得其意可読

之僧経朝点了

〔墨書〕墨之訓并声以興福寺寿慶聖人本移点也、与前

□両本同処ヲハ、不別移之也

〔白書〕保安二年^{辛丑}十月一日移点了、僧惠嚴

積覚澄之本 (図版35)

〔卷第八〕

〔白書〕点本経云寛治元年^{丁卯}五月廿三日已尅於興福寺

上階馬道以西第六大房以赤穂珣照聖人点移点了、

処々以朱付定慶聖人讀也、沙門経朝

〔朱書〕同三年正月之比、以元興寺点善本為其本、大都移点了、

若与赤

穂本同処、不別点之得其意□可読之、僧経朝点之

〔墨書〕墨之訓并声以興福寺寿慶聖人本而已、与若両本同処不別

移点之、得其意可読之也、沙門経朝

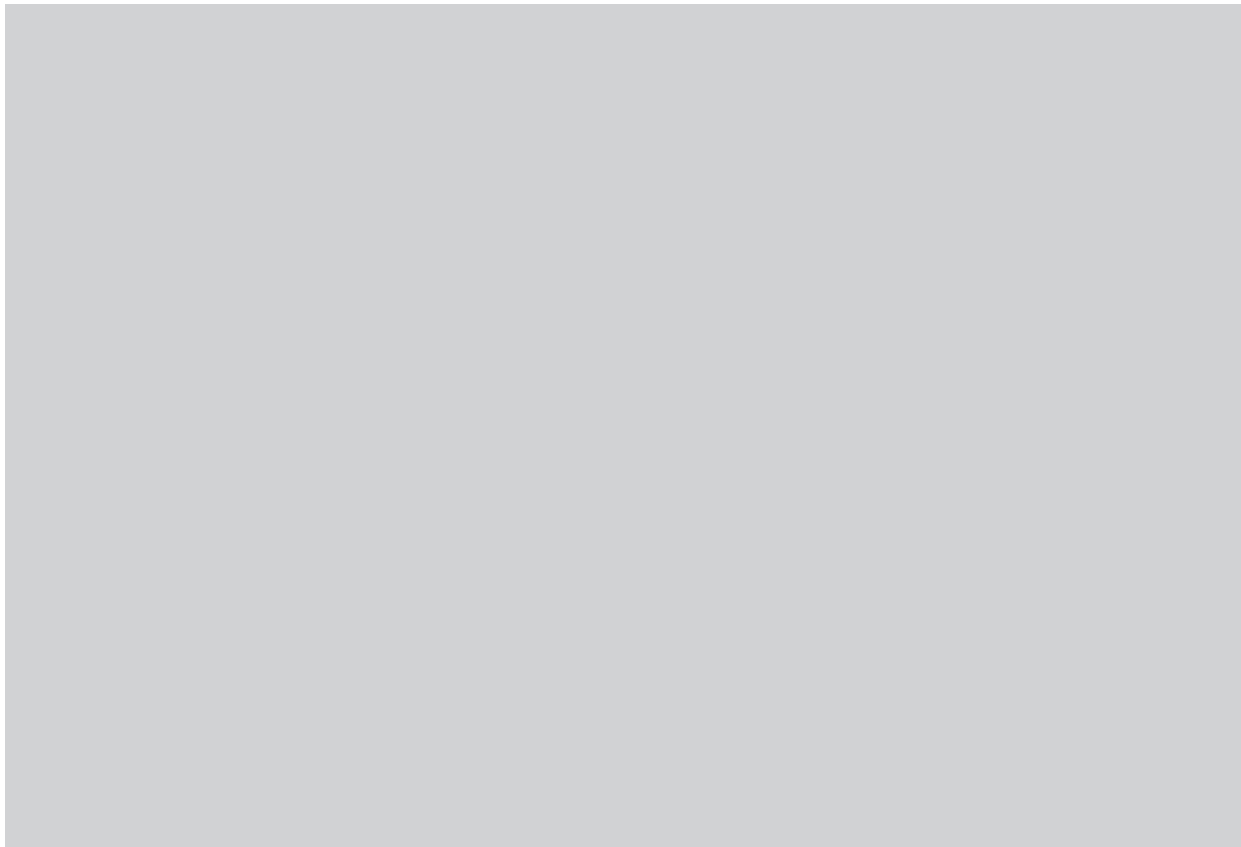
〔白書〕保安二年^{辛卯}九月之比、初数輩同法移点而已、於

□^{身者}身者及知命、不能移点歟、其中雖年少、依法

器履三節、四与八両卷移点了、但有

爽者後見之次可能□、覚□□本

これらによれば、恐らく千手寺本は法華経八卷のみを書写したも



挿図1 法華經卷第一 紙背 (千手寺)

のと思われ、千手寺本の巻第八の奥書より立本寺本の巻第八の尾題の後は本来、経朝の加點奥書があったと見られる。千手寺本の最も重要な点は、訓点資料として立本寺本の欠損部分である巻第二・第六・第八の三巻分を補うことが可能となり、加えて立本寺本では全巻に裏打ち紙が施されているため、その存在も知られることになかったであろう紙背の注記(挿図1)も確認することができるようになったのである。その意味では千手寺本の国語学上の資料価値は立本寺本を凌ぐものがあるといつてよからう。

次に千手寺本は巻第四の一卷を欠いていると述べたが、その一卷が天理図書館に所蔵されているのである。天理図書館本は重要美術品の認定を受けているものであり、その法量と奥書は次のようである。

〔奥書〕

〈巻第四〉

(白書)「点本経云寛治元年五月十六日以赤穂珣

照聖人点為其本移点了、処々付音読是

定慶聖人之讀而已 末学沙門経朝」

(朱書)「点本経云同二年正月之比、以元興寺明詮僧都点導

本為其本、以朱大都移点了、若与赤穂同処者

第4巻	紙 継
48.4cm	①
50.7	②
50.6	③
50.8	④
50.4	⑤
50.6	⑥
50.4	⑦
50.2	⑧
50.2	⑨
50.6	⑩
50.5	⑪
50.2	⑫
50.5	⑬
50.4	⑭
50.4	⑮
50.5	⑯
50.0	⑰
45.0	⑱
	⑲
	⑳
	㉑
900.4	計
26.0	縦法量

不別点之以朱統甬処^{モアリ} 朱甬得其意可読之、僧經朝点了」

(墨書)「墨ノ点訓并声等興福寺寿慶聖人訓声而已」(図版33)

経文は首尾完結しており、書風や紙色、一紙の行数や界高・界巾などは千手寺本に一致し、白点・朱点・墨書や紙背の注記も存在している。ただ奥書は本奥書のみで保安二年の加點奥書は見られないが、これは千手寺本巻第八の覚澄の加點奥書の中に「四与八両卷全移点了」とあることから見て、巻第四の加點奥書は本来無く、巻第八の奥書で巻第四のも兼ねた結果と見てよいのではなからうか。

また天理図書館本の「授学無学人記品第九」という品名の上に経典を読んだ日付であろうか「十四日」(挿図3)という別筆の墨書があるが、これは千手寺本巻第三中にある「十日」「十一日」「十二日」(挿図

2) という日付に続くものであることは間違いない。

これらによって千手寺本で欠失している巻第四は天理図書館に所蔵されていることが明らかとなり、両者合わせて八巻一具の資料となった。更に訓点資料としての千手寺本は、中田祝夫著『古点本の国語学的研究』⁵⁾にその名が見られるものの今までほとんど人目にふれていない資料であり、千手寺本の訓点等について詳しく述べたものは見当たらない。

料紙に関していえば、数多い古写経の中で料紙に藍紙を用いた遺品は非常に少なく、立本寺・千手寺両『法華経』以外では「泉福寺焼経」と呼ばれている河内国泉福寺旧蔵の『華嚴経』が知られ、古写経以外でも藍紙本『万葉集』(国宝・本館蔵)が知られている程度で

挿図2 法華経巻第三 (千手寺)

挿図3 法華経巻第四 (天理大学附属天理図書館)

ある。

このように千手寺本は、『法華経』の訓点資料としても非常に重要な遺品であり、数少ない藍紙を用いた古写経であると共に制作年代を十二世紀初期とある程度特定できる古写経として実に貴重な作品と位置づけることができよう。ただ現状では巻首を中心に破損が著しいのが惜しまれる。

(赤尾栄慶)

〈注〉

- 1 覚澄・秀覚については不詳だが、永治元年(一一四一)十月二十九日付の「東大寺牒案」(『平安遺文』古文書編第六卷二〇五九頁)中に見える「伝灯法師覚澄」「伝灯大法師秀覚」に該当するかと思われる。
- 2 門前正彦「立本寺藏 妙法蓮華経古点」(『訓点語と訓点資料別刊第四』昭43)に詳しい。
- 3 『平安遺文』題跋編(一八九―九一頁)参照。
- 4 『天理図書館 稀書目録 和漢書之部』第三、八二頁所載。
- 5 同書一二頁及び六六―二頁参照。